

在籍保育園における親子療育教室の有用性について
—保護者アンケートおよび保育士インタビューから—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 恵子, 橋本, かほる, 玉, 節子, 森尾, 恵里, 山口, 恵子, 田中, 久子, 長谷川, 清美, 佐藤, 幸代, 中川, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8088

在籍保育園における親子療育教室の有用性について

ー保護者アンケートおよび保育士インタビューからー

竹内 恵子*¹ 橋本かほる*² 玉 節子*³ 森尾 恵里*³ 山口 恵子*⁴
田中 久子*⁴ 長谷川清美*⁴ 佐藤 幸代*⁴ 中川 京子*⁴

(2013年9月30日 受付)

発達に気がかりさを持つ子どもとその保護者を対象とした親子療育教室を子どもの在籍する保育園で実施した。参加した保護者に対するアンケートおよび親子療育教室を運営した保育士へのインタビューを行い、在籍保育園における親子療育教室の有用性について検討した。保護者および保育士への効果は従来の自治体や療育機関等における親子療育教室同様であり、さらに在籍園での実施は家庭と保育園との関係向上、通常保育とのリンク、保育士の資質向上等に有用であることが示唆された。

キーワード：地域科学・親子教室・保育園・発達・療育・保育士・保護者

1. 背景

1-1. 保育所の機能強化

平成20年3月「保育所保育指針¹⁾」が告示され、保育所における質の高い保育と子育て支援機能の強化が求められた。国は「新待機児童ゼロ作戦²⁾」において「国および地方公共団体において保育所における質の向上のためのアクションプログラムを策定し、質の向上のための保育所の取り組みを支援する」とし、「保育所保育指針等の施行等について³⁾」において、地方の実情をふまえた「地方公共団体版アクションプログラム」を策定することが望ましいとした。

1-2. 福井市の現状

福井市では、第2次次世代育成支援対策推進行動計画「あい・らぶ・子ども未来プラン⁴⁾」において「福井市の保育所における質の向上のためのアクションプログラム⁵⁾」を作成し、子どもの健全な育成と保護者の安心を確保するため、保育サービスの充実を図ることを位置付けた。この

*¹福井大学教育地域科学部生活科学教育講座

*²金沢大学大学院医学系研究科

*³福井市福祉保健部保育課（現、福祉保健部子育て支援室）

*⁴福井市立保育園

アクションプログラムに基づき、各保育園^{注1)}の沿革や保育方針、地域特性等をふまえた園独自のアクションプログラムを策定することになった。

福井市の合計特殊出生率は全国平均より高いにもかかわらず、就学前児童数は平成18年から平成24年の7年間で630人減少している。一方保育園への入所は、平成18年度7,203人（就学前児童数の47.5%）から平成24年度7,704人（同52.3%）と年々増加している。特に低年齢児入所の増加があり、この7年間で3～5歳児の入所児童数は11人減少しているにもかかわらず、0歳児は80人、1歳児は288人、2歳児は275人増加している⁶⁾。

保育園に在籍する子どもで、保育上支援を必要とされ、障害児保育・ふれあい保育推進事業^{7)注2)}対象となっている児童数は、平成18年度110人から平成24年度162人に増加している。また同事業対象とならないが、保育士が気がかりさを感じている児童は、平成24年度671人となり在籍児の8.5%に相当する⁸⁾。

支援を必要とする子どもの保育をするにあたり、福井市では各保育園に支援担当者（職種：保育士）を配置し、研修によるスキルアップを図り、職員の支援体制を強化してきた。

また平成22年度から、保育カウンセラー配置事業⁹⁾を実施してきた。この事業は、心理士や言語聴覚士等の専門職が保育カウンセラーとなり、公私立保育園・私立幼稚園・子育て支援センター等を訪問して児童観察を行い、保護者、保育士・教師等に対して相談・助言・指導を行うものである。平成22年度から平成24年度で、保育カウンセラーの委託数は10名から15名に、のべ活動日数は259日から349日に、相談件数は1,082件から1,527件へと増加した。保育カウンセラー事業を通してみえてきた現状を以下にまとめる¹⁰⁾。

① 子どもについて

- ▶ 落ち着きがない、こだわりがある、集団行動やコミュニケーションが苦手と考えられる子どもが増えている
- ▶ 低年齢入所に伴い、早期から発達の気がかりさを見いだされやすくなっている
- ▶ 早期に子どもの状況を把握し適切なかわりをすることで発達促進が可能である

② 保護者について

- ▶ 育児に困難さを感じていたり発達の気がかりさに気づいていても保育士と子どもの状況を十分理解しあえないことがある
- ▶ 子どもの発達の気がかりさに気づきにくく、園から子どもの状況を伝えても伝わりにくい場合がある

注1) 児童福祉法では「保育所」が正式名称であるが本稿では通称「保育園」を用いている。

注2) 県で定める基準に該当すると判定された中軽度障害児の保育実施のために必要な保育士を加配するための雇用経費を助成する事業。

- ▶ 専門機関への受診や療育に参加することをためらう場合がある
- ③ 保育士および保育園について
- ▶ 発達に気がかりさをもつ子どもの育ちの理解やかかわり方、保護者支援の方法等、保育士の知識や力量がまだ十分とはいえない
 - ▶ 担任保育士を支える職員の支援体制が不十分である
 - ▶ 実践力を向上させる研修方法の工夫が必要である
 - ▶ 療育機関、行政機関で育児支援を受けて保育園へ入所してくる子どもへの継続支援体制が確立していないため支援が途切れてしまうことがある

定型発達をする子ども達の保育のみならず、様々な発達状況にある子どもの保育、その保護者支援等、保育士および保育園が担う役割は大きいですが、現状はまだ課題が多い。

1-3. 親子療育教室について

保育上支援が必要な子どもの背景は様々で、基礎疾患や発達障害等なんらかの診断がついている場合もあれば、保護者の育児力や家族関係が関与している場合もある。

診断の有無は別として、育ちにくさのある子ども、保護者が育てにくいと感じている子どもに対しては様々な援助が全国的に試みられており、定期的な保護者への助言や個別の療育など様々ある。

そのひとつとして、小グループでの「親子療育教室（親子教室）」がある。この「親子療育教室」とは、発達に気がかりさのある子どもの発達段階に応じて設定されたプログラムに、複数の親子が定期的に参加するものである。このような「親子療育教室」は、全国の自治体や医療機関、民間団体等様々な機関で実施されていて、その有効性について多くの報告があり¹¹⁻¹⁵⁾、以下のようない点があげられている。

- ① 子どもにとって
- ▶ 保護者と一緒なので安心感をもって楽しみながら参加できる
 - ▶ 個々に応じた配慮がなされることで言語発達や社会性等の発達促進が期待できる
 - ▶ 毎回ある程度決まったプログラムを繰り返し行っていくことで集団適応力が上がる
- ② 保護者にとって
- ▶ 子どもの特徴や発達について気づくことができる
 - ▶ 集団での子どもの様子に気づくことができる
 - ▶ 親子遊びを経験することで子どもへのかかわりかたを知ることができる
 - ▶ 育児に悩む保護者が自分以外にいることを知る
 - ▶ 親の障害受容がすすみ専門機関受診につながるきっかけになりうる

③ スタッフ/実施機関にとって

- ▶ 個々の発達状況に応じてスタッフがかかわることができる
- ▶ 子どもの発達を経過観察することができる
- ▶ 子どもの集団での様子を把握できる
- ▶ 保護者の子どもへのかかわり方や、育ちや育児に対する意識を知ることができる
- ▶ 専門機関へ紹介するより誘いやすい

福井市においても、保健センターや療育機関等で親子療育教室が実施されており、これらの教室を経験してから保育園に入園したり保育園と併用している親子がいる。

一方で、これらの「親子療育教室」は設置場所や開催日時等の関係で、親子によっては利用したくてもできない場合がある。また子どもの発達や育児に不安を抱えつつも、保健センターや療育機関等へ通所・受診するまでの気持ちが持てないという場合もある。また保育園が子どもの発達に気がかりさを感じていても保護者がそれほど感じていない場合に、保育園以外の機関への紹介はなかなかしにくいという現状もある。

このような現状を鑑み、福井市では子どもが在籍している保育園で「親子療育教室」を実施することで、親子の参加意欲を高め、早期支援につながる可能性を考えた。親子療育教室は前述の通り様々な効果がすでに見いだされているので、在籍保育園で実施するメリットとしてさらに以下が考えられる。

① 子ども

- ▶ 保育園は通い慣れた環境、保育士による指導であるため参加への抵抗感が少ない

② 保護者

- ▶ 子ども同様、慣れた環境や保育士であるため参加への抵抗感が少ない
- ▶ 毎日通所している園であり距離的に通いやすい
- ▶ 土曜日に実施することで保護者が仕事を休まず参加できる可能性が高い

③ 保育士

- ▶ 普段の子どもの様子や保護者の状況を把握しやすい
- ▶ 普段保育をしている場所での実践なので、環境設定や教材の準備等が行いやすい
- ▶ 親子療育教室での実践内容を日常の保育へ展開できる可能性がある

④ 保育園

- ▶ 親子療育教室での実践を園内研修等を通じて職員の資質向上に還元できる
- ▶ 親子療育教室を行っていることを他の保護者に周知することで、様々な発達をする子どもへの認識を高めることや、子育てのヒントを提供することが可能になる

福井市公立保育園のうち、先進的な研究を担う統括保育園（市内で4園設置）に指定されているA保育園で「親子療育教室」を実施し、その有用性について検討することとした。

2. 研究方法

発達の気がかりな子どもとその保護者を対象とした親子療育教室を子どもの在籍する保育園で開催し、参加した保護者に対するアンケートおよび担当した保育士へのインタビューから在籍保育園における親子療育教室（以下「教室」）の有用性を検討する。

2-1. 教室の概要

(1) 教室参加親子について

本研究において教室の対象とした「発達の気がかりな子ども」は、表1のような子どもである。医療機関への受診歴、基礎疾患の有無は問わないが、療育機関にすでに通所している子どもは対象外とした。

表1 対象とした子どもの状況

<ul style="list-style-type: none"> ・ 言語発達の遅れがある ・ 感覚の過敏さがある ・ 落ち着きがない、遊びが転々とする ・ パターン的な発話が多かったり、やりとりが続きにくい ・ 友達とのかかわりが少ない、相手の意図がくみとれない ・ 場面のきりかえが苦手、新規なことへの不安が強い ・ 歩行の不安定さや不器用さなど運動発達面の気がかりさがある
--

前年度末に園長または主任から対象児の保護者へ個別に教室の説明と参加打診をした後、保育カウンセラーとの面談を経て参加確定とした。保護者へは口頭および文書で研究目的を説明し、文書による同意を得た。

子どもの発達状況については、教室参加前後でKIDS乳幼児発達スケール¹⁶⁾を保護者および担任保育士が行った。

(2) 教室の概要

教室のプログラムは表2のとおりである。

登園から「きょうの遊び」までは親子が一緒に活動する。

学習会では、スタッフから当日のプログラムの目的や子どもの様子について解説し、発達に関するミニ講義、保護者からの感想や質問、情報交換等を行った。

10回の教室終了後、学習会を土曜日の午前中に4回、不定期に実施した。毎回テーマを決め、スタッフによるミニ講義と意見交換を行った。

表2 教室プログラム

【実施場所】	福井市立A保育園 ホールおよび保育室
【時間】	土曜日午前中 全10回実施 (2013年6月～9月；初回から第2回が1ヶ月間隔、以後第10回まで毎週)
【参加者】	2～4歳児クラスに在籍する発達に気がかりさのある子どもとその保護者 10組
【プログラム】	
	登園、自由遊び
9：30	朝のあいさつ、体操
9：45	出席確認、パネルシアターや紙芝居
10：00	きょうの遊び（ふれあい遊び、運動遊び、ルール遊び等）
10：30	おやつ（保護者は別室で学習会）
11：00	終わりのあいさつ 降園

保護者は、プログラムが記載されたシートに当日の子どもの様子や感想、家庭での取り組みを記録し、翌週水曜日までに保育園へ提出する。担当保育士がコメントを記入し、次回の教室案内とともに保護者へ金曜日に返却する。記録や学習会での資料、メモ等を保護者自身が残していけるよう教室開始時にファイルを配布した。

(3) スタッフ構成および役割

教室の企画運営には「園スタッフ」として、園長、主任保育士2名、担任保育士2名の計5名、園外の「専門職スタッフ」として、市保育課職員（保育専門官、保育指導員、保健師各1名）、保育カウンセラー（言語聴覚士）、大学教員（小児科医）が加わった。

親子が降園後にスタッフミーティングを行い、当日の親子の評価をしたのち、次回プログラムの検討を行った。実際のプログラム進行は主に園スタッフが行った。

また「連携スタッフ」として、県こども療育センター小児科医、市保育課栄養士、市保健センター保健師が加わり、10回の教室終了後の学習会でのミニ講義を担当した。

2-2. 保護者アンケート

全10回の教室終了後、保護者にアンケート用紙を配布し後日提出を依頼した。

2-3. 保育士インタビュー

全10回の教室終了約1ヵ月後に園内スタッフである保育士5名にインタビューを実施した。

3. 結果

3-1. 教室の参加状況

教室開始時の子どもの年齢は2歳4ヶ月～4歳8ヶ月であった。

各回の参加者数は表3のとおりである。毎回の子どもの平均参加人数は8.5人だった。途中で参加を中断した親子はいなかった。父親の参加もあった(2家族)。母親が次子妊娠中で子どもと一緒に十分に動けないという理由が主であったが、両親そろっての参加もあった。また子どもが体調不良等で教室に参加できなくても学習会のみ参加した母親もいた。

表3 参加状況 (単位：人)

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
子ども	10	9	9	7	7	10	7	8	10	8
母親	9	8	9	6	7	9	6	7	9	6
父親	1	1	0	1	2	2	2	1	2	2

3-2. 保護者アンケート結果

参加者10組全員から回答が得られ、回答者はすべて母親であった。教室の内容、スタッフの援助方法、子どもや保護者自身の変化等について合計20項目のアンケート(表4)を実施した。

(1) 教室の実施形態について

10回の開催回数については、10名中8名が「適切だった」を選択し、2名が「少なかった」を選択した。開催時間については、全員が「適切だった」を選択した。毎週開催については、6名が「連続でよかった」、2名が「隔週程度がよい」、2名が「その他」であった。「その他」の記述は「子どものためなら毎週がよい」「お盆は休みがよい」というものであった。

(2) 教室への誘い方や個人面談について

園長、主任保育士が保護者に対して教室への誘いを行ったが、誘い方については7名が「適切だった」、2名が「なぜ誘われたかわからなかった」、1名が「その他」であった。「なぜ誘われたかわからなかった」「その他」として、「教室の主旨がわからなかった」「わが子に療育や相談が必要と思っていない段階ではとまどいがある。段階をふんで伝えてもらえるとうよかった」との記載があった。

教室開始前の保育カウンセラーとの面談は全員が「あるほうがよい」を選択し、わが子に対する悩みや不安を聞いてもらったり助言を受けられたことがよかったとの記載があった。

表4 保護者アンケート項目

1. アンケート記入者
2. 開催回数について
多かった 適切だった 少なかった
3. 時間（9：30～11：00）について
長かった 適切だった 短かった
4. ほぼ毎週開催することについて
連続でよかった 隔週程度がよかった その他
5. 園長（主任）が教室参加のお誘いをしましたが、誘い方はいかがでしたか。
適切だった なぜ誘われたかわからなかった その他
6. 教室開始前の保育カウンセラーとの面談について
あるほうがよい なくてもかまわない わからない
7. 教室のご案内や記録用紙など配布した資料の内容はいかがでしたか。
わかりやすかった もう少し詳しいほうがよい もっと簡単なほうがよい その他
8. 活動中のスタッフへの保護者の方への声かけやアドバイスはいかがでしたか。
適切だった もっとしてほしかった 活動中はいない その他
9. 学習会でのスタッフによる当日の遊びの解説はわかりやすかったですか。
よくわかった だいたいわかった もっと丁寧に説明してほしかった その他
10. 毎回記録を書いて提出していただきましたがいかがでしたか。（複数回答）
①子どものことを考えるきっかけになった ②生活や遊びを見なおすきっかけになった
③保育園からの返事で家族内での対話にひろがりがあった ④記録を書くのは負担だった
⑤記録することの意味がよくわからなかった ⑥その他
11. 学習会のうち3回のミニ講義は子育てや日常生活の参考になりましたか。
とても参考になった 多少参考になった あまり参考にならなかった その他
12. 教室に親子で参加することで、保育園でのお子さんの様子をイメージすることはできましたか。
かなりできた ある程度できた あまりできない わからない その他
13. お子さんにカードなどで前もって予定をしらせておくことは有効だと思われましたか。
かなり有効と思った ある程度有効と思ったそれほど有効でない わからない その他
14. 教室に参加して、ご家庭での親子遊びのレパートリーは増えましたか。
かなり増えた 増えた あまり増えなかった わからない その他
15. 14で具体的にどんな遊びをなさるようになったか教えてください。
16. 教室に参加してからお子さんが変わったなど感じられる点、あるいは変わらないなど感じられる点があればお書きください。
17. 教室に参加して、お子さんと一緒に遊ぶ楽しさや大切さを感じられましたか。
強く感じた ある程度感じた あまり実感はない わからない その他
18. 教室参加を通して、ご自身およびご家族の子育てや子どもの見方に変化や気づきがあればご記入ください。
19. 今後学習会で取り上げて欲しい内容があればご記入ください。
20. 上記以外で教室全般についてご意見やご要望があればご記入ください。
（*質問2、3、6は、選択した理由についても尋ねている）

(3) 教室のすすめ方について

教室の案内や記録用紙、配付資料の内容については、全員が「わかりやすかった」を選択した。活動中のスタッフの保護者への声かけやアドバイスについては9名が「適切だった」、1名が「もっとしてほしかった」を選択した。学習会時に行う当日の遊びの解説については6名が「よくわかった」、4名が「だいたいわかった」を選択した。

毎回、保護者が教室での子どもの様子や家庭での様子、感想を記録して翌週保育園に提出し、保育士がコメントを記入して返却することを行ったが、それについて複数回答で尋ねたところ、9名が「子どものことを考えるきっかけになった」、6名が「生活や遊びを見なおすきっかけになった」、6名が「保育園からの返事で家族内での対話にひろがりが出た」を選択した。「記録を書くのは負担だった」「記録することの意味がよくわからなかった」はいずれも選択されなかった。

10回の学習会のうち、3回は専門職スタッフが発達に関するミニ講義を行ったがその内容については、全員が「とても参考になった」を選択した。

(4) 教室参加による変化について

保育園での子どもの様子を保護者がイメージすることができたか、という質問に対しては5名が「かなりできた」、5名が「ある程度できた」を選択した。

教室では、活動の切りかえ時に写真や絵カードを使ったが、それらが子どもにとって有効だったかどうかについては、「かなり有効」「ある程度有効」が5名ずつだった。

家庭での親子遊びのレパートリーが増えたかどうかについては、3名が「かなり増えた」7名が「増えた」を選択した。具体的な遊びについては、全員が教室で行った遊び（体操や親子で対面で作る遊び等）の名前を具体的に記載していた。

子どもと一緒に遊ぶ楽しさや大切さを感じるようになったかという質問では、全員が「強く感じた」を選択した。

子どもが変わったと感じる点、変わらないと感じる点について記述してもらった。「順番が待てるようになった」「積極的に遊べるようになった」「周りと一緒に行動するようになった」「落ち着いた」「きりかえができるようになった」とプラスの変化を9名が記載した。1名は「それほど変化がなかった」と回答した。プラスの変化を記載した9名のうち7名が「声の大きさの調節ができない」「苦手なことはやろうとしない」「思うようにならないと泣き叫ぶ」「警戒心が強い」など変わらないと感じる点も記載していた。

保護者や家族の子育てや子どもの見方の変化や気づきがあれば記載してもらおうとしたところ、全員がなんらかの記述をしていた。「子どもに対して気持ちにゆとりをもって接するようになった」「父親が育児に積極的になった」「子どもの気持ちをきりかえさせる方法がわかった」「子どもと向き合っただけでゆっくり遊ぶのを楽しめた」「園と家庭で一緒に育てていると実感できた」「子どもが園でどのように過ごしているのかわかった」「スタッフの子どもへの接し方が勉強になった」

「ほめるようになった」等、自分自身の変化のみならず、家族の変化や園との関係についての記載もあった。

（5）教室全体について

学習会で取り上げて欲しい内容として、発達に効果的な絵本の選び方、上手に活動に誘う方法、療育について、しつけについてなどがあげられていた。

その他の自由記述では、きょうだいがいる場合の教室への参加しづらさへの支援や親同士の交流をもっと増やしてほしいといった要望、親子で向き合う時間が経験できたことへの喜びや次年度以後の教室の継続希望があった。

3-3. 保育士インタビュー結果

園スタッフの保育士5名に個人インタビューを実施した。質問はあらかじめ用意したが自由な回答も可能な半構造化面接とした。インタビューは教室終了約1ヵ月後に実施した。インタビュー時間は1人約30分、インタビューは専門職スタッフの大学教員が担当した。

5名の保育士歴は18年～39年（平均29年）、A保育園在籍年数は初年度～6年であり、園長、担任を持たない主任2名、担任が2名である。うち1名は本園着任前の2年間、福井県立こども療育センターへ出向し親子療育教室の担当経験がある。また1名は同センターの研修受講歴（「発達障害児支援に関する保育士研修」3ヶ月コース全12回）がある。

以下「保育士が感じた子どもおよび保護者の変化について」「教室の運営について」「保育士自身の変化について」「園内研修への展開」の観点からまとめる。表中の『 』はインタビューで語られた内容、（ ）はインタビュアーによる補足、〈 〉は回答者の属性（園長、主任保育士、担任保育士）である。

（1）保育士が感じた子どもおよび保護者の変化について（表5）

子どもについては（①）保育士によって名前をあげた子どもは異なっていたが、子どもの成長や保育士との関係の変化が語られた。

保護者については（②）子ども理解がすすんだり育ちの見通しができるようになったこと、子どもへのかかわり方の変化や育児への積極性などを感じている一方で、通常保育場面での様子が伝わりきらなかったのではないかと懸念をもつ保育士もいた。

保護者と園の関係については（③）子どもの姿を教室で担任と保護者が共有できたことで園での状況や保育士のことばを受けとめやすくなった、園への信頼が増したといった関係向上を感じている。

(2) 教室の運営について (表6)

5名の園スタッフ間連携はよく (①) 否定的な感想はなかった。

園スタッフ外職員の協力については (②) 主任による仕事分担もなされたが、職員の自主的な協力があつたことが述べられた。主任のひとりはこの時期教室中心に動き、ふだんより保育補助へ入ることが少なくなつていて他職員の負担への懸念があつたようである。

プログラムの進行 (③) は、プログラムを主となつてすすめる「主保育士 (担任保育士2名が交代で担当)」が1名、他は「サブ保育士」としてサポートをする。さらに主保育士は、学習会時に当日のプログラムのねらいを保護者に解説する役割も担つた。通常保育とは異なる状況でプログラムを進めていく主保育者の大変さとともに経験することのよさが述べられた。

専門職スタッフについては (④)、保育とは異なる専門性からの視点や助言の効果が述べられたが、まだ自信がない場面でのサポートの必要性も述べられた。

今後の教室運営への言及もあり (⑤)、低年齢児対象の教室の企画や他園での実施の期待や意気込みが述べられた。

(3) 保育士自身の変化について (表7)

5名ともなんらかの変化を感じていた。子ども理解の深まり (①)、自分の保育の変化や自信、通常保育へ展開することの重要性、療育への意識や興味への言及があつた (②)。

保護者支援への影響もあり (③)、保護者への伝え方を見直したり、保護者と話すときの自信ができた、といったことがあげられた。また教室参加児の保護者に限らず保育士から保護者へ働きかけていくことの重要性への言及もあつた。

(4) 園内研修への展開 (表8)

教室での子ども様子をビデオ撮影して園内研修に利用したり、スタッフの子どもへのかかわり方を口頭で伝えるなど、園スタッフ以外の職員への還元を試みた。

職員への効果として (①) 職員の積極性が述べられ教室が職員の保育への刺激になっているとも述べられた。

一方で教室でのスタッフの学びを伝えきれないもどかしさや実践の省察不足や研修方法等今後の課題への言及もあつた (②)。

表5 (1) 子どもおよび保護者の変化について

①子どもについて
『落ち着いてきた〈園長、主任、担任〉』 『短い会話ができるようになりました〈園長〉』 『教室でやっていたことを（日常）保育でやると目に見えてできるようになっていきました〈担任〉』 『担任ではない（教室の）スタッフの保育士に子どもがひっついてくるようになりました〈担任〉』 『困ったときに私に訴えてくるようになりました〈担任〉』
②保護者について
『子どもがどこで困っているのかということに気づいてくださったので一歩すすんだ〈主任〉』 『お母さんがやっと子どもの状況を受け入れた段階になったと思います〈主任〉』 『子どもが問題行動を起こしたときに、今までならずその行動をなくそうおさえようというのが多かったのが、ああこうだから（わが子はこういうタイプの子だから）こうしないといけないな、とお母さんが思うようになったのが大きいです〈担任〉』 『〇〇ちゃんのお母さんは以前は連絡帳を書かなかったりおばあちゃんだったりしたのが、お母さんが書くようになりました。一番変化したお母さんと思います〈担任〉』 『（学習会での）意見交換や（ミニ講義の）内容もお母さんにしっかり入っているようでした〈担任〉』 『将来的なことをお母さんが話すようになりました。お母さんが子どもの育ちの見通しを話すようになりました。今のことだけではなく。これは大きい変化です〈園長〉』
『〇〇ちゃんと〇〇ちゃんのお母さんには、普段の園の様子を伝えきれなかったと思います。教室は気がかりな子ばかりで（そういう子どもに合わせた活動や援助をしていたから子どもが活動にのれたのだが）、うちの子は（他の子と）同じくらいできていると安心されたかもしれないので。教室での姿が普通ではない（暦年齢相応ではない）ことを伝えきれなかったと思います〈担任〉』 『学習会は勉強の機会になったけれど我が子のこととして十分に意識できているかというとまだ不十分、それぞれのお母さんにもっと丁寧に返していかないと〈園長〉』
③保護者と園の関係について
『（気になる行動を連絡帳に）書くとお母さんに悪いかなというのではなく、あったことを伝えるとお母さんにその様子が思い浮かぶみたいで、お母さんとのやりとりがスムーズになったかな〈担任〉』 『うちの子のことわかってくれてるよね、みてくれてるよねという信頼度が高くなったと思います。家のできごとを言ってくれるようになったり、うちでやってみただけできなかった、これからこんなこと起こるかなとか〈園長〉』 『10回一緒にすると顔も何回も合わせるので話もしやすくなるし、（連絡帳だと）文字に残るとというのがドキドキしてコレ書いて大丈夫？とか心配だったけれど連絡帳も活用しやすくなった、気軽にできるようになりました〈担任〉』

表6 (2) 教室の運営について

①園スタッフ間連携
『手探りだったが方向性は一致していた〈主任〉』 『すごくみんな信頼できて〈主任〉』 『園長だから主任だからというのがなくて、お互いに意見が言いやすい、感想が言いやすい関係でよかった〈担任〉』 『事務的なこと、準備のだんどりは主任がやってくださったので（自分に）負担はなかった〈担任〉』
②園スタッフ外職員の協力
『（スタッフ以外の）先生方に負担があったかも〈主任〉』 『スタッフ以外にもみんなが親子教室に参加できるように主任の先生がわりふってくださったので助かった〈担任〉』 『（スタッフ以外の）先生も何かできないかと言って、バッグや教材を作る手伝いをしてくださったりした。園全体で作り上げた印象があります〈園長〉』
③プログラム進行者として〈担任保育士〉
『すごくためになっているのもわかるけどしんどいです。普段の保育のようにといわれるけれど普段とちがうというか…流れをスムーズにしなければならぬという気持ちが最初は強くで大変でした』 『親に伝えながら保育をすすめていく大変さがありました』 『主保育士をやってみないとわからない大変さがあります。教室の子ならではの流し方があります』 『子どもたちは主（保育士のとき）のほうがよく見えます。系統的にどうしたらいいかな、ここでこう指示したらうまくいったんかなというのはサブ（保育士のとき）のほうがよく見えます。両方経験するのがいいと思います』 『教室でやったことを生かそうと思うとクラス担任がスタッフになるのが一番いいと思います。でもそれをすると普段の保育もあって…みんなでフォローする体制を作りつつやれるといいと思います』
④専門職スタッフについて
『1回1回の（専門職スタッフとの）話が研修になりました。他の先生にもこういう機会があるといいと思う〈主任〉』 『（専門職スタッフが保護者に）きついことを言っているけれど前向きな助言を伝える伝え方、ナイーブなことを伝えるが親を前向きにさせてしまうやり方（をみていて）、もっときちんと深く伝えていいのかなと思いました〈園長〉』 『（保育士とは）子どもの見方、保護者の見方がちがうのでそれぞれの先生のアドバイスをもらえるのが参考になる〈担任〉』 『自分が手探りでやっていたことに先生方に理論をつけてもらった感じで自分のなかで自信になりました〈主任〉』 『保育士の立場で親に言いにくいことを専門職に言ってもらえるのはよかったです〈担任〉』 『当日の遊びのねらいは、（専門職スタッフに）こういう意図があってやってますと言ってもらったほうがよかったです。まだ自分自身半信半疑だったので〈担任〉』
⑤今後の教室運営
『もう少し低年齢の教室をやってみたいです。低年齢だとちがう発見があるだろうし、低年齢ほど親と一体感があるので早く介入する効果があるかな〈園長〉』 『スタッフがどこ（の保育園）へ異動していても（教室が）できるようにしたいです〈園長、主任〉』 『（他園で教室をやるとしたとき）A保育園だから（できた）…とならないようにしないと。保護者に共感していく、はどの園も同じはず。やり方は園の様子を見ながらやっていかないと。保護者の最前線のところでは常勤も非常勤も意識は同じと感じます〈主任〉』

表7 (3) 保育士自身の変化について

①子ども理解への影響
『自分の気づかない（子どもの）気がかりさに気づくことができました〈主任〉』 『子どもに対する見通しがつくようになりました〈担任〉』 『ひとりひとりを今までよりよく観察するようになりました〈担任〉』 『教室での様子を見ていて思ったよりわかっていなかったんだとか友達を見て動いているんだなあとか、（自分の）子どもを見る目がかわって来たと思います〈担任〉』
②自分の保育への影響
『こういう子だからこうしてあげればいいんだというのが少しわかるようになりました〈担任〉』 『手遊びとか○○ちゃんは教室でやっていたことが今になって日々の保育で見える（できる）ようになった。教室での遊びをくりかえし（通常保育で）やるのが大事だと思います〈担任〉』 『教室での手だてが（保育のなかで）役立っている〈主任〉』 『自分が手探りでやっていたことに（専門職スタッフに）理論をつけてもらった感じで自分のなかで自信になりました〈主任〉』 『療育に関する本などに興味が出てきました。具体的なイメージを持ちやすくなったからかな〈担任〉』 『保育じゃなくて療育ってなんやろと思ってて訓練とかそういうイメージがあった。頑張ってるというイメージがあったけれど、わかりやすいようにこっちが配慮してそういう環境のなかで子どもが学んでいくというのがわかって…〈主任〉』
③保護者支援への影響
『担任以外からみた（子どもの園での）姿を保護者に伝えることも大事と思いました〈主任〉』 『お母さんから質問がきたときに経験だけでなく理論的に裏付けされた答えを返してあげられる〈主任〉』 『（園行事のときに保護者達の様子を見ていて）親子教室ってすごく大事やなと思った。親子教室で見たから親を動かさなきゃと思った。そんなこと思ってなかった〈主任〉』

表8 (4) 園内研修への展開

①園スタッフ外職員への効果
『積極的にビデオを見たり教室での様子を聞いていました。情報共有は積極的でした〈園長〉』 『自分が担任している子の姿を追い、どうしていこうという気持ちが高まっているのがわかりました〈主任〉』 『（担任間で）こういうときにどうしたらいいだろうという会話が多くなりました〈担任〉』 『自分のクラスの子が参加している先生は親子の様子とかふだんどうちがうのか聞きたいと積極的でした〈担任〉』 『（教室の）スタッフとして入っていない担任にもよい刺激になっていました。子どもがわかりやすく集まれるようマットを使うとか教室での内容が園内へ広がった〈園長〉』
②不十分な点
『日々の保育に取り入れていく内容をクラスの先生に昼寝の短い時間で伝えていくのが難しかったです〈担任〉』 『自分でイメージして伝えたつもりでも、いっぱい質問があって口頭での伝達は難しいと思いました〈担任〉』 『担任している子以外は普段の様子がわからないので、（教室の様子を聞いても）どうなのかなと思いました〈担任〉』 『親子教室でやったことを通常保育で実践してそれを省察する時間がとれていないです〈主任〉』 『園内研修のやり方を工夫していかないといけないと思います〈主任〉』

4. 考 察

4-1. 保護者にとっての親子療育教室の有用性

保護者アンケートおよび保育士インタビューから、保護者が子どもの発達の特徴に気づく、子どもへのかかわり方が変化する等、過去の報告同様の効果があることがわかった。10回の教室参加や教室終了後に専門機関受診や療育を開始した子どももあり、受診のきっかけにもなっていた。保護者への効果を促した背景として以下のことが考えられる。

本教室は、毎回スタッフミーティングで親子の評価を行い次回のプログラムを決定した。10人それぞれ発達段階が異なるので、ひとつの遊びをする際、子どもによってはルールを変更したり視覚支援の方法をかえたり、グループ活動でありながら個々の発達段階も考慮するというきめ細やかなプログラムにした。

また、保護者へあらかじめ当日のプログラムを知らせ、学習会ではプログラム内容の意図と実際の子どもの様子を解説をした。プログラム進行中には保護者にどう子どもに働きかけていただくのがよいのか、うまくいかないときはどうするかを、複数のスタッフがいる利点を生かして個々の保護者へ声かけを行い、時にはスタッフが手本となり子どもへかかわることも行った。

学習会では参加している子どもと保護者の抱える課題に焦点をあてたテーマをスタッフ間で協議して決め当初予定していた内容を変更するという柔軟性ももたせた。

さらに、保護者が教室当日の子どもの様子や感想を記録して提出し、担当保育士がコメントを記入して返却するというのを毎回行い、全員が全回記録を提出された。保育士のコメントの書き方もスタッフミーティングで検討し、保護者へのアドバイスや保育園が考えていること、次回の教室参加意欲を高めるようなコメントを書く工夫をした。

このような子どもひとりひとりを考慮したプログラムやかかわり方への支援、保護者自身の記録によるふりかえりやスタッフによる解説等が保護者の気づきやかかわり方の変化を支えたものと考えられる。

4-2. 在籍園での実施について

教室の参加は、7-10人/回（平均8.5人/回）であり、途中で参加をやめた親子はいなかった。父親の参加は当初想定していなかったが、結果的に2家族で参加があり土曜日開催の効果と考えられた。また毎週開催は負担かと思ったが、保護者10名中6名は適切と評価しており、適切と評価しなかった保護者も子どものためには毎週開催がよい、お盆は休みがよいという記述であり、集中的に開催することで参加意欲が下がることなく継続したのと考えられた。通常送迎時にスタッフが家庭での子どもの様子や保護者の気持ちを聞いたり、次回の教室参加を促したりといったことが自然な形でなされたことも効果的だったと考えられる。

また、参加した子どもは同学年や同クラスであり、親子とも互いに知っており第1回から参加者間の緊張は少なかった。ふだん使っている保育室やホールでの活動であったこと、スタッフも

知っている保育士であったことも、初回から子どもにとっても保護者にとっても安心できる要因であったと考えられる。

通常保育で子どもが楽しんでいる遊びを教室で親子一緒にやることもあった。保護者が子どもの保育園での様子を具体的にイメージすることができるようになり、家庭でその遊びを親子で繰り返し、その結果保育園での子どもの遊びへの参加度があがるという、通常保育→教室→家庭→通常保育、のサイクルができた遊びもあった。

これらは、在籍園で教室を実施した効果といえよう。

4-3. 保育士・保育園にとっての有用性

(1) 子ども理解、保護者支援に関して

スタッフにとっての有用性として、子どもの発達を経過観察できる、集団での様子が把握できる等がすでにあげられている。今回の教室は在籍園での開催なので、子どもの発達の経過観察、集団での様子の把握については通常保育でも可能である。しかし、教室の配慮されたプログラムのなかでの子どもは通常保育とちがう姿もあり、その様子を見て、通常保育では気づかなかった点に保育士が気づくということがあった。保育士自らの気づきだけでなく、専門職スタッフの異なる視点からのコメントで気づかされるといった経験も述べられている。教室は、スタッフである保育士にとっても子ども理解の新たな機会となっていたといえる。

また保護者の子どもへのかかわり方についても、文献同様、子どもに適切な指示や援助ができていない姿が見えたり、逆にスムーズに対応している姿が見えたり、子どもの特徴の受けとめ方や回数を追うごとにかかわり方が上手になっていく実感などが、保育士インタビューからうかがえた。今回、保護者とのかかわりは、教室のときだけでなく通常保育においても継続している。教室での保護者の姿を考慮しながら、子どもの様子を伝えたり子どもへのかかわり方などを通常の送迎時や個人懇談のなかで援助することが可能であり、より適切な保護者支援につながったと考えられる。

園での子どもの状況を保護者にどのように伝えるかは園にとって難しいことである。しかし、教室参加によって、保護者が集団での我が子のイメージを抱けるようになっていったことで、保育士は伝えやすくなった、わかってもらえたと思われる返事が返ってくるといった手応えを感じている。保育士からは保護者の園への信頼度が高まった、保護者からは園と家庭で一緒に育てていると実感できた、といった家庭と園との関係向上がみられており、在籍園での実施ならではの効果と考えられる。

(2) 通常保育との関連

教室では、子どもが通常保育で経験している遊びを取り入れたこともあった。経験済みの遊びを取り入れることで、子どものプログラムへの参加意欲を高めることができた。また通常保育で

は子どもが楽しめなかった遊びを、教室で提示方法や環境設定をかえて行うことで親子に成功体験を経験させることができ、スタッフが子どもの細かな発達段階を確認していくこともできた。

さらに、教室で行った遊びを、その後の通常保育で取り入れるという展開をしたが、子どもが積極的に参加できたり楽しむ姿が見られたことを保育士は実感している。これは、教室で子どもが経験している遊びを行っているからということもあるが、今までの通常保育では、子どもの発達段階や特性の理解が十分でなく、保育士の指示の出し方や提示のしかたがその子どもにわかりにくかったことも考えられる。教室では、通常保育で行うよりも視覚支援を多くしたり、活動をそれぞれの子どものに応じて部分的に変更して参加しやすくしたりといった様々な配慮方法をミーティングで検討し実践した。保育士はその検討のなかで、なぜそのような配慮が必要なのかを理解し、またその配慮により子どもが参加する姿を実感していた。教室のスタッフとして教室を運営していくなかで保育士自身の保育観や保育方法が変化し、その結果通常保育での子どもの行動のとらえかたや保育が変化していったと考えられる。

4-4. 保育士研修としての親子教室

(1) スタッフとして参加することの意義

発達に気がかりさを持つ子どもの集団であることや、親も一緒に参加していることは、通常保育とはちがうやり方をしなければならなかった場面も多く、主保育士となってプログラムをすすめる立場になったときの困難さは大きかったようである。しかしその経験は自分自身の保育の振り返りや新たな学びの場としてはよかったと述べられた。

また4-3.(2)で述べたように、スタッフとして互いに相談しながら、プログラムを考えたり教材を準備したりしていくなかで子どもの発達についての理解が深まり自らの保育観が変化する効果があった。専門職が入ることで、保育士とは異なる視点からの子どもの見方やかかわり方、保護者支援の方法などを知る機会にもなっていた。

今回の教室は、担任を持たない主任が事務的作業を中心に担い、スタッフ外の職員も親子教室の教材作成を手伝うといった全園の協力体制があったが、日常業務および保育との兼ね合いの問題はある。

このように運営にかかわる大変さはありつつも、在籍園での教室にスタッフとして参加することは保育士の資質向上という点で効果があるといえよう。

(2) 園内研修への展開

今回、教室での子どもの様子をビデオ撮影して園内研修に利用したり、教室での子どもの様子やかかわり方を口頭で伝えるなど、スタッフ以外の職員への還元を試みた。

職員の園内研修での積極的な様子、伝えられた子どもへのかかわり方を保育場面で実際に活用するなど教室の内容を園内研修で活用できる可能性はある。

一方で教室参加児を担当していない保育士は、ふだんの子どもの様子を知らないので担任ほどの積極性が出にくいなど、研修方法の検討はさらに必要である。

5. 結 語

在籍保育園での親子療育教室は、従来の自治体や療育機関等における教室同様保護者の子ども理解や育児支援、スタッフの子どもや保護者理解の場として意義があった。

そして在籍園での実施は、家庭と保育園との関係向上や通常保育とのリンク、保育士の資質向上に有用であることが示唆された。

一方で、在籍園での実施に伴う体制作り、教室参加の誘い方や学習会での保護者間交流など教室運営の検討、園内研修方法の工夫、教室終了後の子どもの発達フォロー、保護者の意識や育児支援の継続をどのように行っていくか等が今後の課題である。

参考・引用文献

- 1) 保育所保育指針 厚生労働省告示第141号 2008.3.
- 2) 新待機児童ゼロ作戦 厚生労働省 2008.2.
- 3) 保育所保育指針等の施行等について 厚生労働省 雇児発第0328001号 2008.3.
- 4) 福井市第2次次世代育成支援対策推進行動計画「あい・らぶ・子ども未来プラン」
福井市市民生活部男女共同参画・少子化対策室 2010.3.
- 5) 福井市の保育所における質の向上のためのアクションプログラム 福井市福祉保健部保育課 2011.10.
- 6) 福井市福祉保健部保育課調査
- 7) 福井県ふれあい保育推進事業実施要綱 児第719号 2004.6.
- 8) 福井県子ども家庭課「保育所における気になる子の現状に関する調査」2012.9.
- 9) 福井市保育カウンセラー配置事業 福井市福祉保健部保育課 2010.8.
- 10) 福井市福祉保健部保育課「保育カウンセラー配置事業に関するアンケート」2012.2
- 11) 辻貴文、田畑治. 地域療育教室における発達障害児への早期支援に関する一考察. 愛知学院大学心身科学部紀要 2006; 2: 27-40
- 12) 佐田久真貴. 保健センターにおける親子教室の有効性について—最前線で母子保健活動を担う保健師と臨床心理士の連携— 小児の精神と神経 2010; 50 (3): 303-314
- 13) 河野智佳子、伊藤良子. 東京都内保健センターで行われる親子教室に関する調査研究 東京学芸大学紀要 2011; 62 (2): 287-296
- 14) 田丸尚美. 親子教室における親子・家族関係の変化～1歳半健診以降の発達支援事例を通して～ 福山市立女子短期大学紀要 2011; 38: 51-56
- 15) 浜本真規子、永田雅子. 親子教室に参加する親の援助要請を支える要因 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 2011; 58: 113-118
- 16) 三宅和夫. KIDS乳幼児発達スケール. 財団法人発達科学研究センター 東京